

学校経営のポイント

## 教科等を魅力化する力

若井 彌一

“ 卯年迎えて この<sup>ひととせ</sup>一年は 山河を越えて 夢を追う ”

新年を迎えました。昨年中のご愛読に感謝し、読者の皆さま方のご多幸とご活躍を心からお祈り申し上げます。

### 中教審での“教員の資質向上”論議

昨年6月3日に、文部科学大臣から中央教育審議会（以下、「中教審」と略）に諮問された教員の生涯を通じての資質向上方策の審議について、ある程度整備されたものが「審議経過報告案」として文科省から中教審に提示され（昨年11月30日）、これが波紋を広げているという（時事通信社『内外教育』2010年12月24日号、「波紋広がる『教員修士化』案」田幡秀之氏執筆）。

「案」がとられて、「審議経過報告」として公表される予定のはずであるから、近々（？）に公表されるものと思われる。

公表された段階で、その内容について考察を加えてみたいと思うので、今回は上記の「波紋広がる『教員修士化』案」を一読して、「こんな議論の仕方でいいのかな？」と思われることを一点だけ述べておきたい。

それは、中教審での議論に、各委員の立場があまりにもストレートに反映されすぎてはいないか、ということである。

要するに、議論の深まりが必ずしも十分でなく、各委員の個人的な印象・感想、直接または間接の体験や見聞に依拠した意見・主張が展開され、それが併記されたものにとどまっているのではないかということである。

この国の教員養成制度の将来を左右する可能性が

ある改革構想の論議（審議）がされているのであり、単なる各立場の委員が想定する利害得失をめぐる論争であってよいはずはない。

「審議経過」が公表されたのち、審議の内容と方向性についてのパブコメ（パブリックコメント）の募集についても、今後、中教審での審議が深められて「熟議」のお手本となるような工夫が期待される。

### 学校での学びを充実化する“教師の指導力”

改革構想の深化は中教審に期待するとしても、学校現場では、休むことなく教師と児童・生徒の「教え・学びの相互活動」が実践されている。この「教え・学びの相互活動」を、感動のある、充実感を味わえるものにするうえで、各教師には、自分が担当する教科等について、魅力あるものにする不断の工夫や努力が不可欠である。

児童・生徒たちが、ある教科等を「好き」になるのも、「嫌い」になるのも、それを担当する教師が、どれだけ魅力化できる力を備えているかに依拠するところが大きい。というより、決定的であろう。

古い話になるが、筆者が東北大学の教養部で「教育原理」の講義を担当していたころ、受講者へのアンケートにより、小・中・高等学校での先生との出会いで、ある教科等を好きになっていく例があまりにも感動的に綴られていることが多いことを知り、教師には教科等を魅力あるものにする努力・工夫が必須であることを痛感したものである。このことは、歳月が流れても変わらない。

教師は、各教科等の学びの道案内人としての力を常に向上させるように、日々、研修に努めたい。

（わかい・やいち = 上越教育大学長）

本紙は<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●最新刊発売！ 25人の校長の臨場感あふれるとっておきの式辞！ A5判/192頁/定価2415円

『小学校・中学校入学式・卒業式に贈る校長式辞』大澤正子・輿水かおり【編】

『教員の養成・免許・採用・研修』若井 彌一【編著】 A5判 370頁 定価3,570円